

齊董集

卷之一



1545
1



骨董集



醒；老人積年所著小說九百，不讓
虞初。世態情實，多而不通。釋文野
乘，無所不窺。若夫椎輪大輅，質不勝
文。名物混淆，鄙哉不鄙。老人者感於
此。冬伍今昨，指摭誣偽。著为一書，名
骨董集。鄉儒先生或朝之云。此瑣；

者。何足以辨矣。吁。大舜好察迩言。孔聖
數誦童謠。吾子知齊東野語。班氏稱街
巷議。後世如田叔禾季。巷叢談。胡元
瑞。莊嶽季。譚。皆是物也。骨董。非何
氏。樓下物也。必矣。比彼不知不作之者。
弱的就箭。掩耳盜鈴。則大有逞庭矣。

骨董上編上首之一

余與老人同一癖。不得不為之一解
嘲也。文化癸酉冬日。杏園主人書于
緬帷之林下。



骨董集上編前帙目錄

上之卷

- 好事之心得 一
- 竹馬 三
- 蝙蝠羽織 五
- 舊吉原兩日のおぼ 七
- 臭を呼ぶ斗二といふ 九
- 豆腐紅葉 十一
- 銭湯風呂始 十三
- 行水船居風呂船 十五
- 伊勢風呂吹 附・風呂吹 十七
- 目黒餅花 十九

- 昔威儀 附・紺屋之 一
- 昔人之質朴 四
- 曹人形 六
- 髭男 八
- 粉之看板 十
- ころばどといふ下踏 十二
- 風呂犢鼻褌 十四
- 石榴風呂・鏡磨 十六
- 金龍山米饅頭 十八
- 耳垢取 二十

骨董上編上首巻

- 臙脂繪賣 廿一
- かぶことといふ言 廿三
- 浮世袋 廿五
- 燈籠踊 廿七

中之卷

- 名古屋帯 一
- めばきき・かむべ 三
- 行燈 五
- 女之編笠・塗笠 七
- 浮世袋再考 九
- 大津繪佛像 十一
- 重箱・硯蓋 十三

- 釜磨猫之蚤取 廿三
- 駒形之螢 廿四
- 初雪之句 廿六

- 火燧 附・池火炉 二
- 挑燈 四
- 笠の下よ布を垂 六
- 桔梗笠 八
- 眞板古製 十
- 浅葱椀 十二
- 二足三文 十四

- 三線鼓弓古製表 [十五]
- 丸げくしの文様 [十七]
- 祖父祖母之物語 [十九]
- 打出小槌 附 猿蟹合戦 [廿一]
- 奈良庭穴電 [廿三]
- 宗祇之蚊屋 [廿五]

- 紫革足袋 [廿六]
- 題目踊蒔繪香合 [廿八]
- 拵游無木 [三十]
- ちまき馬きう里牛 [卅一]
- 長崎柱餅并幸木 [卅四]

前目録終

骨董上編上首之三

骨董集上編上之卷

江戸

醒と輯



○好事の心得 [一]

日本永代藏 創梓の年号多しと云ふも 云む〜連歌師の宗祇法師の此所よ 泉別堀を
 まし〜歌道のそやり〜時よづ〜た本茶屋よ〜ける人のあまてあ〜の句あひの
 時胡椒をあひ小来る人あり坐中〜と〜りりをして一兩りけて三文りけと〜を
 ちづ〜ふ一をを思案〜て分けるをさ〜と〜たさ〜と〜と宗祇殊外よ〜あ〜ん
 さま〜り〜え〜とありありの小風雅を好む此志あ〜と〜家産を破る基とあらん〜ん
 を疎〜よ〜と風雅を好むあひの〜く〜ん〜れ〜人のありたる話あ〜と〜宗祇の
 あらられ〜と〜るが〜ら〜且〜ら〜の〜るえ〜と〜た〜ら〜

○昔の威儀 附 紺屋の白袴 [二]

昔のちづの男女も威儀をほ〜ろ〜めを〜ら〜ら〜と〜威儀を〜ら〜ら〜ら〜ら

「をほひを正ちうさる事あり」
七十二番職人尽歌合 文女宝徳の繪小とて一函入

高人たかひともみ小素襖こせうあくを著き女をんなの頭かぶを布ぬいまで巻上まきあの衣きぬをうのりて著き又またいほ折まり
著きるる体ていを急いそりるををめて考かへ知しべい能のうの狂言きやうげんの室町殿むろまちのの御代ごだい其時そのときのどとて
あつらひ母ははのたみを作つりらげりありと古老こらうの説せつわれが其出そのいで立たちも當時そのときの風件ふうけん
あるべしされば女をんなよひでたらよ自みづかた布ぬいまで頭かぶをほみ西あづまのちと右みぎ左ひだり小結こむすひたれて
それをゆかりしといふ掛衣かきぬをほ折まりて著きるるも職人尽しやくじんじんの繪ゑようのあはれ也

今いまよりあつて四百年しよっぴんほど前の民たみの女の風体ふうていの能狂言のうきやうげんのいせたらとてあはれを起おこすべし
南留別志卷之二なんりゅうべし云い田舎ゐんやの女をんなの木綿もくめんのひらへある物を帯おびしたる上うへよきものを礼服らいふくとて
古ふるの小袷ここうしゆあつてのされるあつて又またいほ巻まきをむるを礼儀らいぎとて職人尽しやくじんじん合あひの繪ゑ小も能
の狂言きやうげん小もあつてあつたみみの女の装束まうそくあるべし」とあり田舎ゐんや人の老實らうじつあるも急いそ小古風ここふう
を失うしなひて昔むかしの威儀いぎのちとあつてつら残のこり○紺屋こんやの白袴しろはかまといふ誇うたがひ今いまもついで
あつた誇うたがひあり
山乃井 慶安元 年印本 卷之四 雪や紺こんめた白袴しろはかまといふあり **崑山集**

慶安四年撰 明曆二年刻 中ちゆうも此こゝ句こうを載のせて貞徳ていとくの句こうとあれがうたひあり案あん小當時そのときの紺屋こんやへ常つねに
袴はかまをきくもよま小此こゝ誇うたがひもありあつて今いまの世よ育よく人ひと様さまといふ誇うたがひのうたは袴はかまをきくと
杜女つひの常つね小打掛うちかけを著きるあつて往古むかしの威儀いぎのあつてありあるべし

○竹馬

唐山たうたんの竹馬たけうまの戯たのあ後漢ごかんの時ときとてあれがいとあり
唐山たうたんの竹馬たけうまといふ異ことあり葉えのはれたる生竹なまけは繩ひもを結むすびて手綱たづなとてられ小うへ
かりとあるを竹馬たけうまの戯たのあ竹馬たけうまの友ともといふ則すなはち是こゝありたは摸もてあせふ
古ふる家けをうらべし今いまの世よのどく弱よわの頭かぶの形かたちはくましたる物ものといふのわらじ **袋草紙**
雜ざ段たんの糸いとよ云い壬生忠見にぶのたけみ幼童幼童之時とき内裏うちらより有あり召無めいむ衆物しゆぶつとて難がた参まゐ之の由よしと
申まを然しかハ竹馬たけうま小ありて可べ参まゐ之の由よし有あり御ご定さだ仍なほ進ま之の此こゝ歌うた

夫木抄 竹馬たけうまハちぢら小といふとより今いま夕ゆふむげ小のりてすあらん
竹馬たけうまを杖つゑあも今いまいたのむくみつらハ提あげを母ははのひでせは 西行

狂畫苑 安永四年 小百鬼夜行の古画を
 年印本 縮しおどろ其のち此畫の戲画
 あれども當時の竹馬のふゆをみる便あり
 好古小録 本朝畫史を合考す
 百鬼夜行の明徳の比の古画あり明徳の
 今之文化十年よりあるを四百十餘年の
 昔より物の頭の形はけくる竹馬も
 あるあり物あり

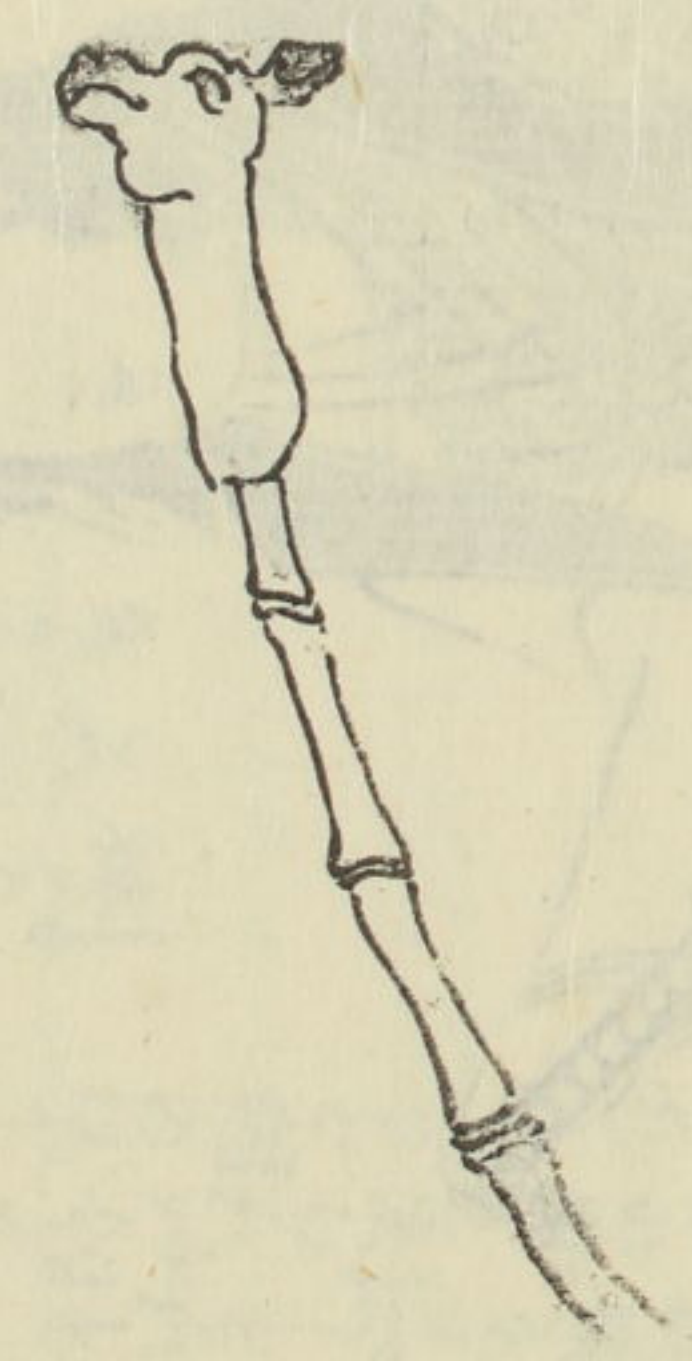


百鬼夜行の古画の怪物
 あれ竹馬の足をうけた
 あれ竹馬の足をうけた
 唯そのあひびきを
 んんのみ

骨董上編 上三

唐山の古銅器小童児竹馬を持たる形を
 鑄たるあり銅色宋時代の物との鑑定
 のうその臨本を得く竹馬の
 宜和年間の物と
 本朝
 鳥羽院の保母の
 比よのより保母
 より今文化十年よ
 りよりを六百

九十餘年ありたれをあるべ
 見五歳より七歳の
 樂あり七歳より
 竹馬の歡ありと鳩車
 對してつれが唐山の此畫の如く竹馬あらん
 彼曼を参り考る小生竹を馬よあらん
 日本様あらん駒の頭よりつるの唐様あらん
 中寄りのつる彼由思ゆ
 あり



曹人形 六

増鏡 うちの雪の条に五月五日和... 御あぶらの花と玉の色...
あふくすうわれと云くこのりあひの八十八代 後深草院位よりせめていとも

右の増鏡の文を引て云曹花の紙をりて曹をほく其上よめいの花をりて
あふひの紙をりて人形をつらりてをるどてつらりてのめをびよるとあり今の端午の

曹蒲曹の遺制ありと云りかこれ説小よりあところつたて日本歳時記
五年のうちの繪をりて曹の上よ人形をつらりてをるどてつらりてのめをびよるとあり今の端午の

人形と別の物ありて人形をつらりてをるどてつらりてのめをびよるとあり今の端午の
下然則右の隨筆小曹の花の曹のう小紙をりて人形をつらりてをるどてつらりてのめをびよるとあり今の端午の

疑小く合曹人形の曹の花の遺制ありと云り疑ありらん曹人形といひ義もこれより
骨董上編上五

骨董上編上五

あたらうありた小横あたらうと番をりて考あべ日本歳時記巻之四端午の
曹蒲曹太の事をりて云此事むりあ厚紙人形をりて竹薄き板を曹の

形小くら或は菰の葉をりて馬を作り或は木を長口のこく小びつりあどて戸
外小立侍りしが近年の風俗美巧をりて木をりて人馬の形をりてをるどてつらりてのめをびよるとあり今の端午の

りりて彩色をりて或は甲曹をりて剣戟をりて戦闘の勢ひをりて
戸外小立侍る曼を曹といひ云くこのり按紙小人形をりて竹板を曹の形を

りりて彩色をりて或は甲曹をりて剣戟をりて戦闘の勢ひをりて
戸外小立侍る曼を曹といひ云くこのり按紙小人形をりて竹板を曹の形を

りりて彩色をりて或は甲曹をりて剣戟をりて戦闘の勢ひをりて
戸外小立侍る曼を曹といひ云くこのり按紙小人形をりて竹板を曹の形を

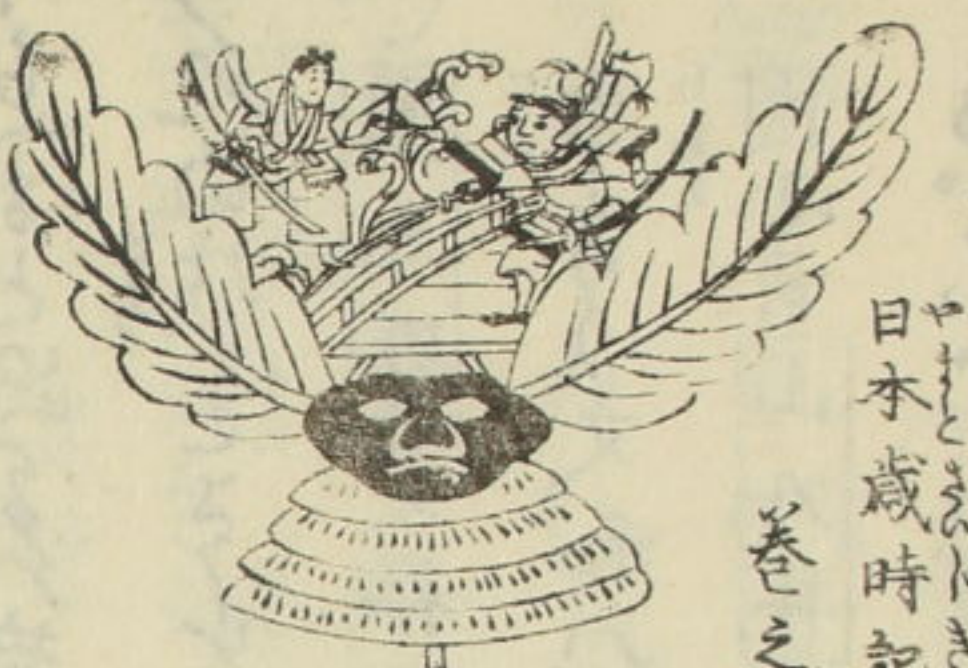
りりて彩色をりて或は甲曹をりて剣戟をりて戦闘の勢ひをりて
戸外小立侍る曼を曹といひ云くこのり按紙小人形をりて竹板を曹の形を

りりて彩色をりて或は甲曹をりて剣戟をりて戦闘の勢ひをりて
戸外小立侍る曼を曹といひ云くこのり按紙小人形をりて竹板を曹の形を

りりて彩色をりて或は甲曹をりて剣戟をりて戦闘の勢ひをりて
戸外小立侍る曼を曹といひ云くこのり按紙小人形をりて竹板を曹の形を

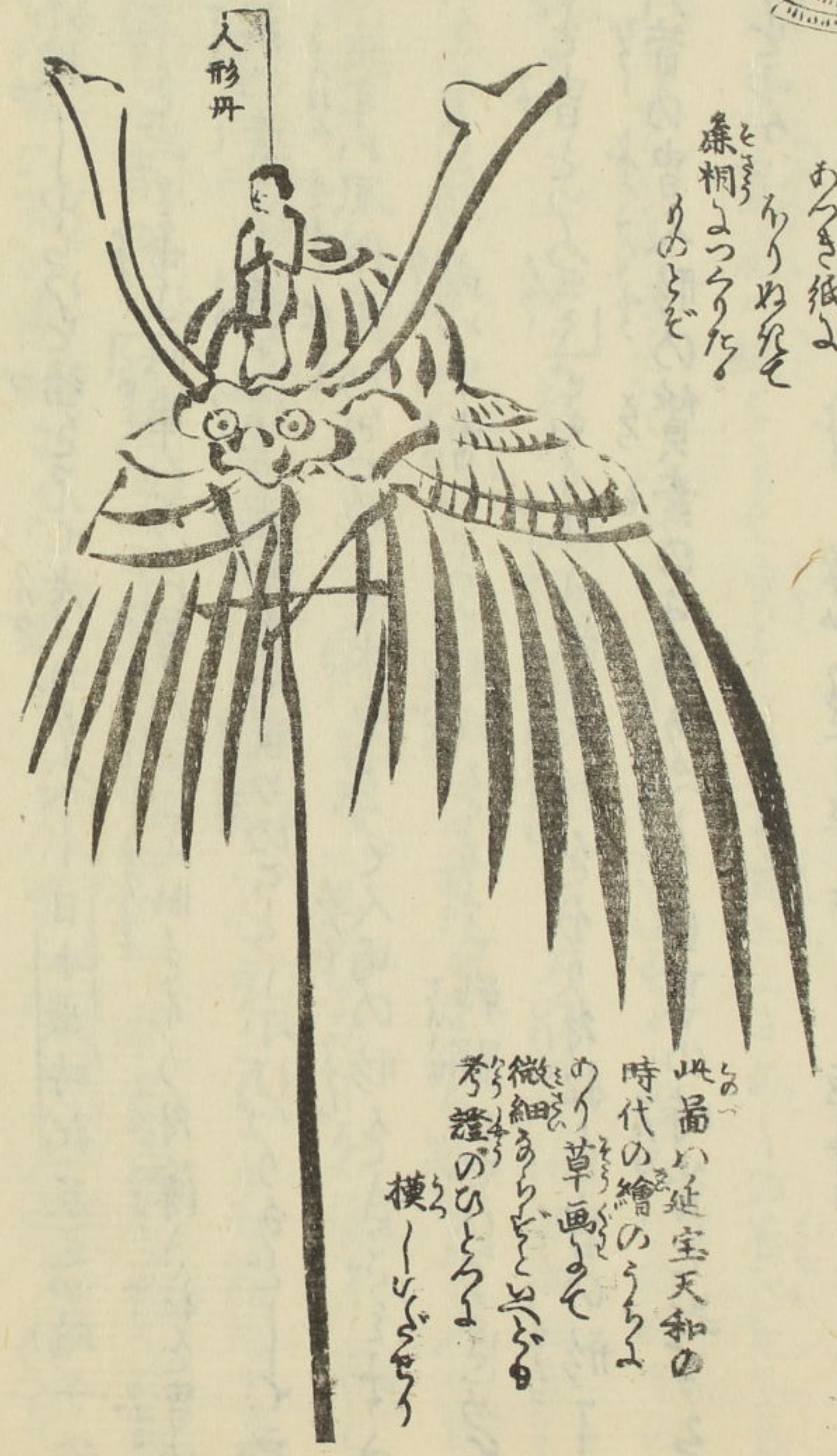
りりて彩色をりて或は甲曹をりて剣戟をりて戦闘の勢ひをりて
戸外小立侍る曼を曹といひ云くこのり按紙小人形をりて竹板を曹の形を

右の書より知る
人形舟



あつち紙よ
わらわねを
藤桐よつらた
りゆとぞ

青人形圖
一種



此局の延宝天和の
時代の繪のうらよ
り草画のそと
微細ありとぞ
考證のひとら
横一いささ

○舊吉原の両中のお舟

万治二年印本私可多曲 香花園 小云むろり江戸のうりれめい花屋あとの所り

むむ也 此処乃遊君は両ある時あゝ道あきまゆろく落あゝあどあ小あた
奴のどあゝ小負てあたゝあゝあゝと奥あればんにとりまにゝ宿の門ふ入ぬれば
ちれせんよとゆる

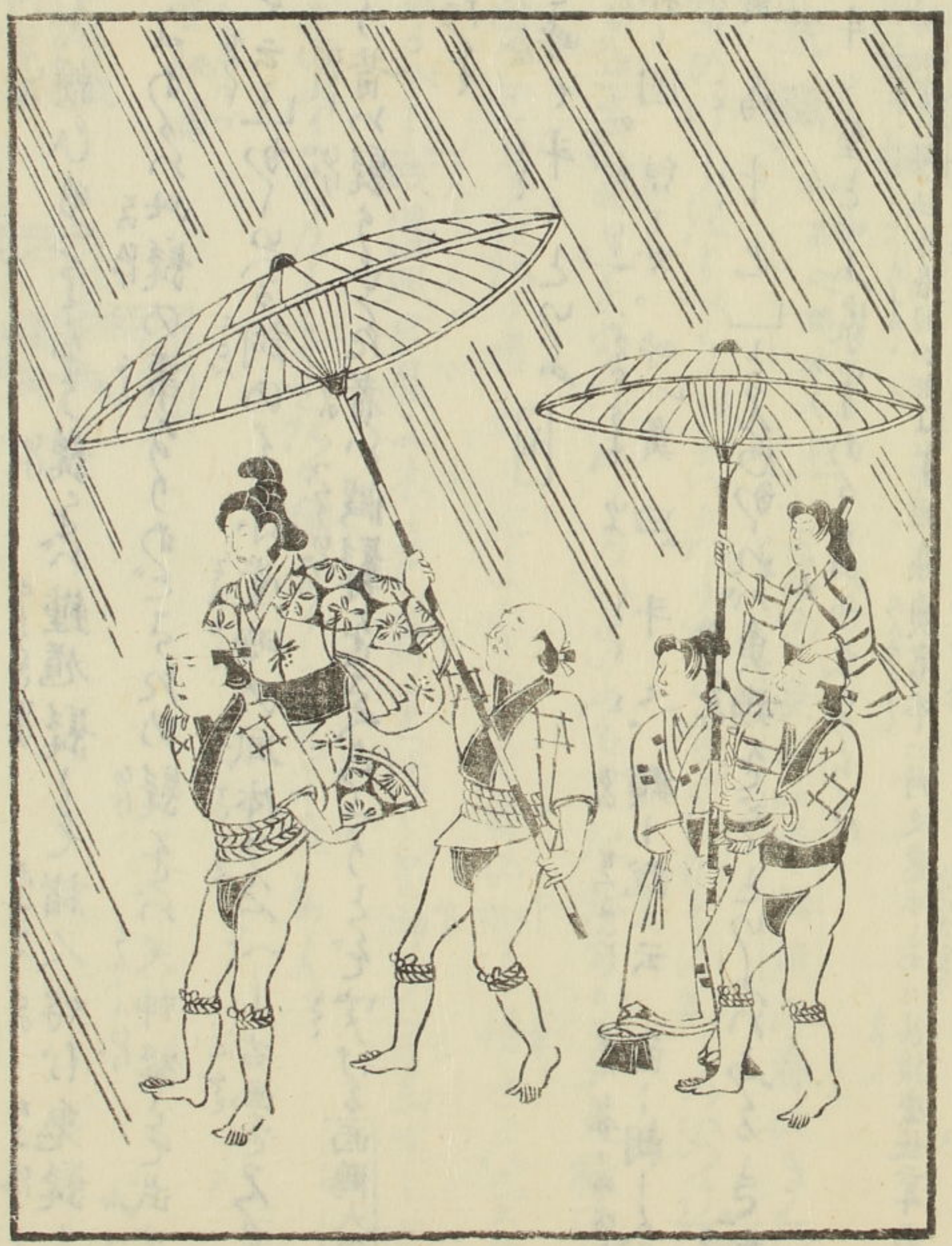
ほく井筒井づくにりけろく後縄負にあらむもえざるまに
わとよまろのろい肩ぐまよてまゝるに全盛らうとある子あればられり遊小めと
つたて遊女く

くららろろあまをけがその肩ぐほい君あらざとたれろあぐべま
とあんとみしと也 異本洞房語圍 享保五年ノ記小云元和年中元と原の比兩のある時
お女どりの揚屋へ通ふ小下男どりの小あつれて行たりかかれ振ハ六尺の繩をめて常は
両のをもとろろ小とぞのめお女あがた小袖を足をはくみりぞを長くたさて

両の膝を六尺の手のうしろのせて臂をそり衣紋のつくりて後より長柄の傘をば
 かけさせたる辨あり品よく見えし」とり其古番を摸してたふらひせしと貞享
 元年板 **三代男** 詞花堂 一之巻小江戸三燈の薄雲が揚屋入のさめをひいたる
 条云 **紫** 立たる曙のうらもさめのおむつひふりんつきの傘角助がさし掛
 肩で風まらしてらら〜ゆる粧の玉両枝ある白梅落と詩人あど詠むは死呀
 角助が背中小栗うつりゆめありさめぬ如来よ〜ふあわれん身よりのさめ
 云」とあれが吉原今の地ふつり〜後も負えて揚屋入ある事あり〜歎
 ○周云元龜の比高禄の武士の妻女も栗物小栗事ある嫁入の時も麻の
 ちづきを著て負木といひゆめのは尻くけ〜ろさめ小負えてゆたける〜
 古老の説の當時の質素の風をび等〜の残るたるあべ〜
 ○元吉原今の地ふつり〜明暦三年あり **私可多咄** の万治二年の板を
 元吉原の時をまことりづるふ二年あれが證とよふたれり

骨董上編上七

石小い私可多咄 とりの
 草紙のうちに此繪あり
 是則元和年中
 今の大門通一吉原
 のり〜時のさめ
 今文化十年よりりて
 ち〜二百年小近き
 昔あり〇あり袖の
 ち〜さめいりる六尺袖
 あり衣服のゆた〜と
 み〜り〇下男ハ〜
 茶葉髪あり昔
 質素の風解るるべ〜
 ○右よりゆらゆる **三代男** の
 うらもゆわ〜のごた番
 ゆた〜もあ〜りむたれが
 換〜い〜



万治武己年季秋吉日
 興書あり

○豆腐の紅葉 十一

瓊鑑

天和三年印本

下之巻「紅葉豆腐の事何國も豆腐のめれども別て當津

のを勝たりと古人より云傳紅葉と云名をかたるこの瓊の櫻鯛もふらと

味あれいとわくしるを花の對する紅葉の縁あるべし又或人の云此豆腐を人

のゆきまると祝て付たる名ともゆり買様と紅葉と音便成ゆえ故今豆腐

の上は紅葉を印と詞と就て形を顯るべし買用も通て「ゆきまは今豆

腐は紅葉の形を印する事瓊の紅葉豆腐は始まるあり紅葉を買様と

取あると幼氣あれど昔此類かゆとされいと色る名註よくとあ人のよれを

りて祝とせざるあり

○固小云古老の説は南天といふ木は本名南天燭あり手水鉢の下は植食物

のういれあどにせざる諸毒を解するおあり鏡の下は敷又い裏小鑄付あど

うの南天を難轉小取すと難を轉せるといふ意よとする禁厭ありといふり

瓊鑑上編上九

紅葉を買様小取あども此たひあるべし能の狂言鑪庵丁といふり

深草の土岩よあんらんぐりのわいれをせるといふ事のり前もゆりあ

ごう能の狂言の古たごあり

○ころびどといふ下踏 十二

文禄より寛永のゆいごの古画をせんよりひきた瓢箪を火打袋或は印籠巾

著の根付とて又の瓢箪ごうりをもちびたる鉢をもちえりて傳て瓢箪

ゆびの轉ざる禁厭ありとされよりゆりありゆりあは江戸の名物ところびどといふ下踏

あり其下踏は瓢箪の形を印するも原彼禁厭のゆいごの事あるゆいご

ゆいごをあらせゆるゆかといひゆいごのゆいごの推當言あれどゆいごゆいごゆいご

ゆいごゆいご

○江戸銭湯風呂の始 十三

寛永十八年印本 ところろ物誌 杏花園 蔵本 云「ゆいご江戸ゆいごゆいごのゆいごゆいご天

十九卯年の夏の比りくま伊勢と市といひしりの銭花檜のあつりよせんたう
風呂を一つ立る風呂浅の永樂一浅あり客人めらうした物哉とて入浴ひぬさ
ども其比の風呂あつんん人のあつり有るわらわりの湯の赤や息がほつりて
物もたれど煙もて目もあつれぬあつて風呂の口もあつりぬる風呂をたのみ一今所
毎に風呂あつり十五浅女浅づて入也と

○風呂積鼻禪 十四

たよわらわを寛永正保の比の銭湯風呂の古番をらるる積鼻禪をむびたるま風
呂入る体をそがりしる工の心を用たる繪をらるるま疑わししあつりらど
昔の民家のやせれ者も風呂入るあつりらどあつりらどあつりらどあつりらど
三年 等のうちあつる後湯風呂の苗をらるるあつりらどあつりらどあつりらど
覺 大同屋敷 宝永二 一之巻小半一之風呂入る事をらるり 御前独狂言 宝永二 五之巻一
或人酒に酔風呂積鼻禪をとらて風呂入るををるまらたことと笑たこととあつり

骨董上編上十

これ宝永の比すを風呂あつりといひのありて常のあつりむむびむて風呂あつり
あつる證あり

○行水船居風呂船 十五

日本永代藏 利梓の年号は... 四之巻は江戸の事をらるる条は或人船つたの自由
とらる行水船といひのをは始り利を得たる事をらるるり 義理櫻 利板の年号は画風
一之巻は和泉の塚の事をらるる条は六太門りて商人の子まれば何かな身だたある
事とて二夫とてに万事えまありければ取はし嶋もあつた小舟は居風呂をらるる破をらる
たる大船のあつりを漕のりた一人三浅の極められぬ女は事ゆふ舟宿をわがりて湯
むらもも入るも出末合を喰ひ相癒のとらけ入るもて母のらるる堪忍して船中小
ららと西仕出居風呂を車室あれとて船一艘より五人十人つ此銭湯は
入つりてあつたの浅をまらるるま」とあれは行水船よりあつりて居風呂船を
らる居風呂船より今の湯船といひのまき一あるべし

寛永正保時代鐵湯風呂古圖

當時の男女とも髪付油を用る者
 其味子ありてゆきよ
 風呂に如定てはれ申すゆきよ
 風呂に如定てはれ申すゆきよ
 風呂に如定てはれ申すゆきよ

半入獨吟集序
 延宝四年之序

風呂の煙も霧をなすなり

附油
 打ち入霧路もたつゆ洗髪

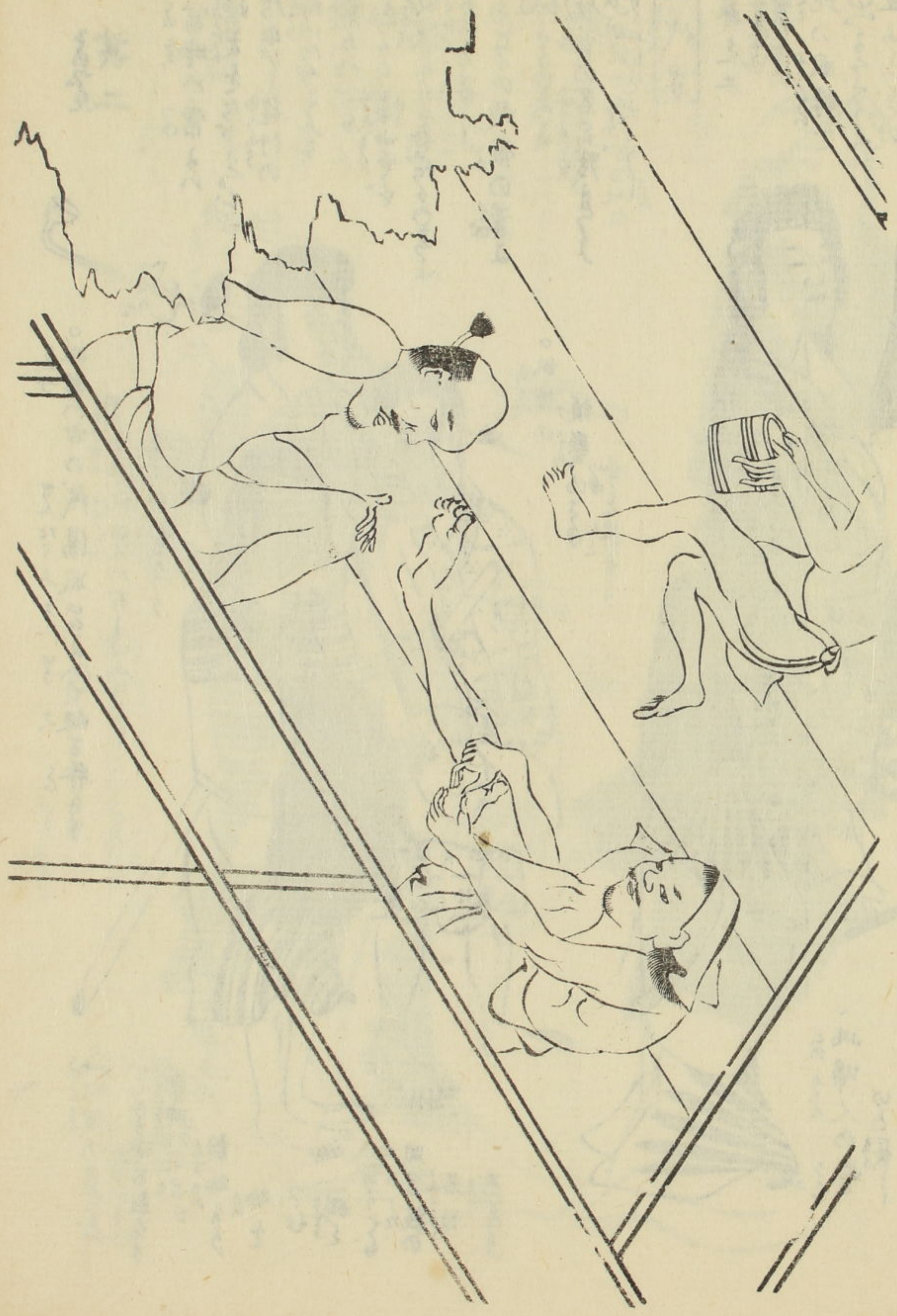
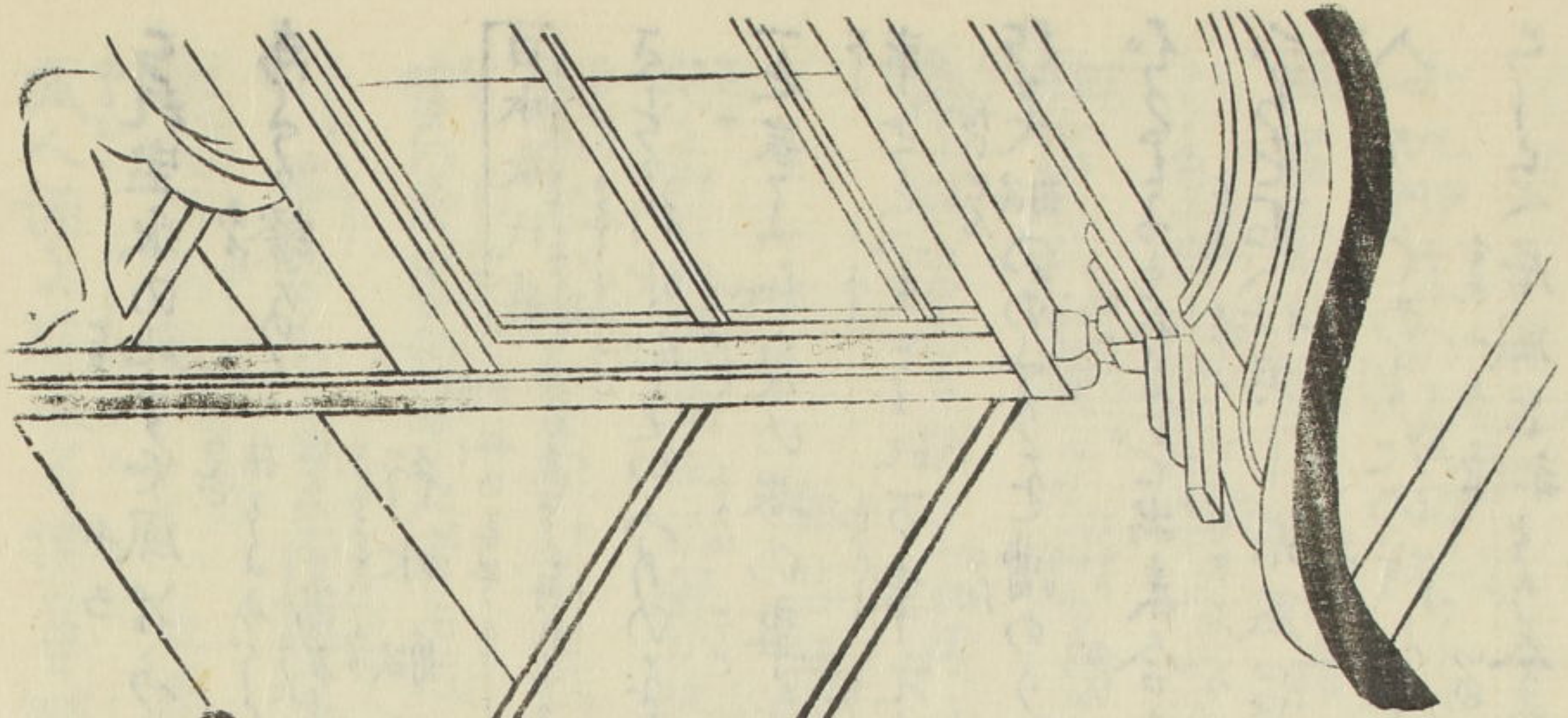
これをも一證とすべし

寛永正保(今より)

文化十年より

前七百七十年の

昔あり



其二

當時ハ常ノ
煙草をたぐふ
たゆ〜遊行の
折れたるもの
車あれども
うづら〜懐中せむ
奴僕より〜せたるもの
夫の〜長
ま〜の頭雁の首
似〜の
雁首の名目残さる
火血〜大ま

代田

巻之二
寛永の
比の風俗を
五〜



此右の浅湯風呂よ〜
男女の乱髪ハ〜
あら〜

奴僕ノ
頭髪ノ
今〜

此奴僕ノ〜
い〜
敷物〜
物〜
科〜
あり〜
風呂敷ノ
名目〜
残さる

骨董上編上十二

き〜と〜
髪〜
古老〜寛永の比の
婦人の帯の廣さ
〜二寸〜
紙を〜と〜綿を〜
〜
古老又云昔の
婦人の髪か〜
長〜を〜
ゆ〜
ゆ〜
〜
〜
〜



男女〜

婦人の
髪ノ結ガ
大異ア
〜

○石榴風呂附鏡磨 [十六]

醒睡笑 元和九年作 石治元年板 二之巻云りつはもあきどとあををいよたへる風呂といひたる、
 わあのであれたを柘榴風呂といふんぞりやあきとりのごころあり「醒と云ぬくしるん
 度詞あり屈と入とりのを鏡鑄といふよりありたるあり昔の鏡を磨は石榴の皮の
 醋を用たるもあきあり今ハ梅の醋をとりらぬ

七十一番職人尽歌合 ぬみとだの月の歌よ

水うひやごころのどむとぬげあきとやぬみとえゆる月のあもてり
 磨うも鏡磨のぬらりよ石榴をぬれたる所をうけり此歌合ハ文安宝徳のちあき
 つまらぬのこどいぬきつるこころ

平武独吟千句 天文九年吟慶安五年刻

附のぬみとださ秋の中山もいこえり

ぬらば天文の比も石榴を用たるべし是等をとり案今江戸の銭湯は石榴といふ

名目の石榴風呂のあきりあるべし然則石榴ハ石榴風呂より出たる名目
 よごごころ風呂ハ鏡磨より出たる名目ありあきとるやあきとるも参考しこころ
 ちのしごぬりあり

七十一番職人尽

鏡磨圖

文安宝徳ハ今文化
 十年よりあきとる三百
 六十余年の昔あり



○伊勢の風呂吹 [十七]

甲陽軍鑑 卷之九 下 天文十四年の条云「風呂のつづれの國もゆへども伊勢風呂と
 中子細ハ伊勢の國元もど變風呂を好て能吹するもゆへて上中下ともよ熱
 風呂をぞく在郷すむ大方村一ツハ風呂一ツげゆととて夫のらとまも風呂あり

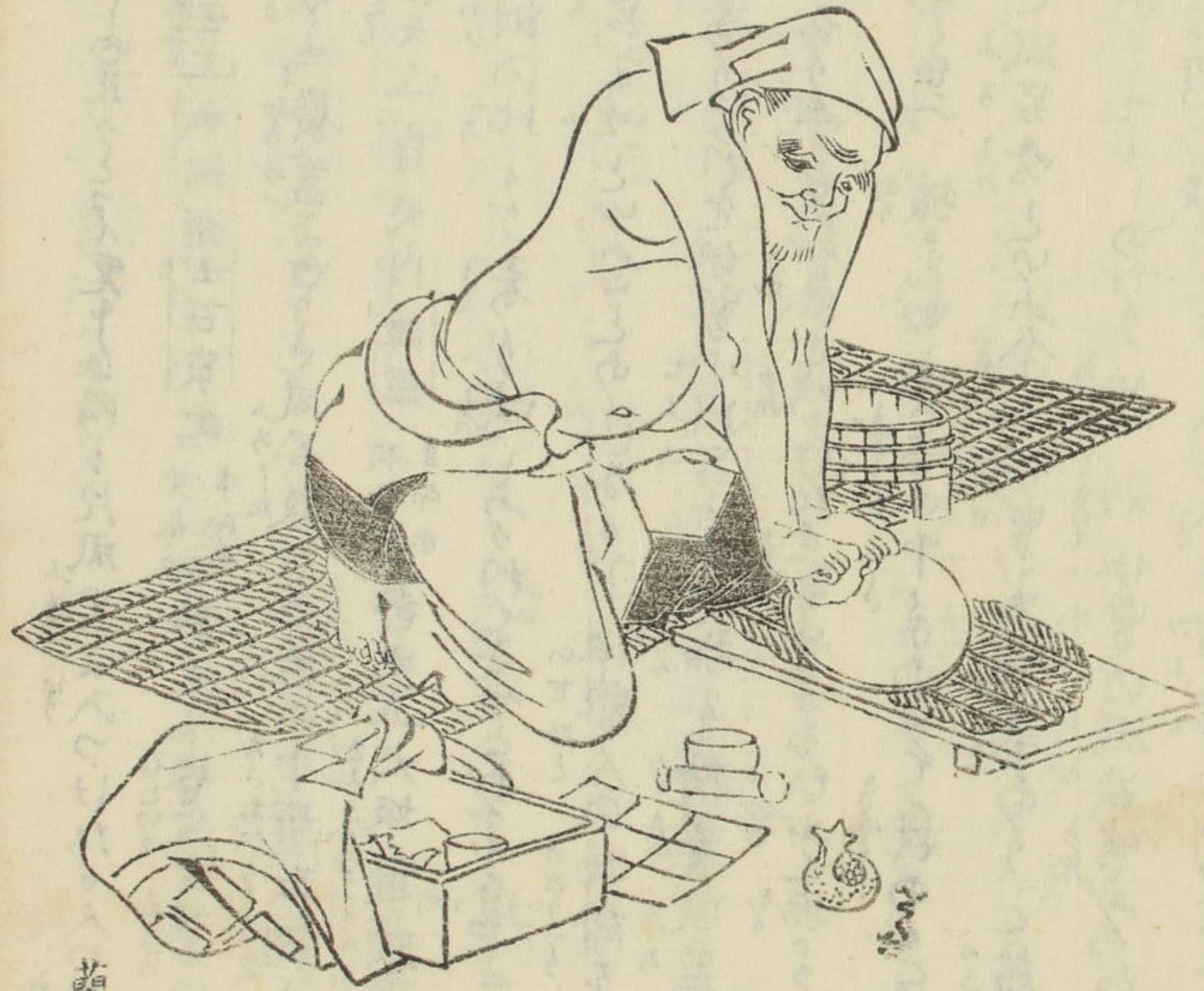
鏡磨古圖

画風をめで考ふるは此繪ハ貞享元禄のころの
 多クはたらんとりてと云ふこと元禄三年板人倫訓蒙畫彙
 又鏡磨のすべり秋のあやりとりのくまの根を合て
 底の粉をまへ梅酢ととくとあれが當時ハ
 石搦り用ざるべし古画よりとづけてゆひるや



骨董上編上十四

月が海岡職人及秋合
 又鏡磨のすべり秋の
 多クはたらんとりてと云ふこと元禄三年板人倫訓蒙畫彙
 又鏡磨のすべり秋のあやりとりのくまの根を合て
 底の粉をまへ梅酢ととくとあれが當時ハ
 石搦り用ざるべし古画よりとづけてゆひるや



蘭奇繪

息を存められた風呂とて由まると見えしゆりた風呂よ入つけたる人の熱風呂中の
らこのことあらざるごとく「よま」
本朝諸士百家記 宝永五年 卷之三 摺入の習の方より風呂
を立てもあらざるをゆるる条「廣蓋より風呂敷の替の下帯取調上より吹
一兩人の催しと風呂入ぬま」
自笑内證 宝永七年 卷之五大坂道頭堀の風呂屋
のゆきとる条「此風呂入相の比より暮り吹しゆれとてわがり場よ坐してま」
とんゆれば宝永の比より風呂を吹といふことありあべ伊勢人の物語をゆふ風呂を
吹といふ空風呂よありとありこれを伊勢小風呂といふ堀を掘者風呂よ入者の方
上息を吹ゆけし堀をゆふありとありは息を吹けたるゆふよりわひ出て堀より落
口もて拍子をとる息を吹ゆふつ堀をゆふより上よりゆふありと自らあらとありとの
ゆふの堀をゆふ者を掘て風呂吹といふ今も伊勢ま此事ありと語りぬ此物語
甲陽軍鑑 又伊勢風呂とありよりゆふり然則伊勢の風呂吹ゆふらとありと
ゆふの物語よゆるも銭湯の名ありあがら今の湯風呂よあらでゆふ風呂

骨董上編上十五

るべー彼是を参考とす昔の風呂ゆふりいから風呂よありあらん下帯を
して入るもゆふ風呂の便宜あるべー内證鑑 くららを汲といふことありゆふ
湯のくらをくらしといひあり○さて大根を熱く蒸て煙の立ちとあるを大根
の風呂吹といふも息を吹りゆふてくららゆふの風呂吹よゆる色もあらん
○金龍山米饅頭 十八
或説江戸の名物米饅頭の根元ハ浅草聖天金龍山の林麓鶴屋あり慶安の比此
家の娘よあり後とゆふり此女始てこれを製とてゆふがまんぢうとて此説ゆふ
たよ摸し物と當のくら延宝の比ゆふに辻賣あり米をゆふといふ米まんぢうと云
も米のまんぢうと云義あり女の名よりゆふひたるとゆふわらざるべー常のまんぢうハ麩
よつこれハ也紫の一本 天和二年 聖天町よゆふまんぢうを南根本の鶴屋といふ菓子屋
根本のゆふの鶴やうみゆらんよゆふまんぢうのたゆふありとあり遺佚
ゆふはゆふと天和の比ハ居店よゆふ賣たるあらん

江戸鹿子

貞享四年
年印本

米饅頭屋試草金龍山ありとや同所鶴屋とあり

江戸咄

先板の故郷飯江戸咄と題す
後増補元禄七年の本あり

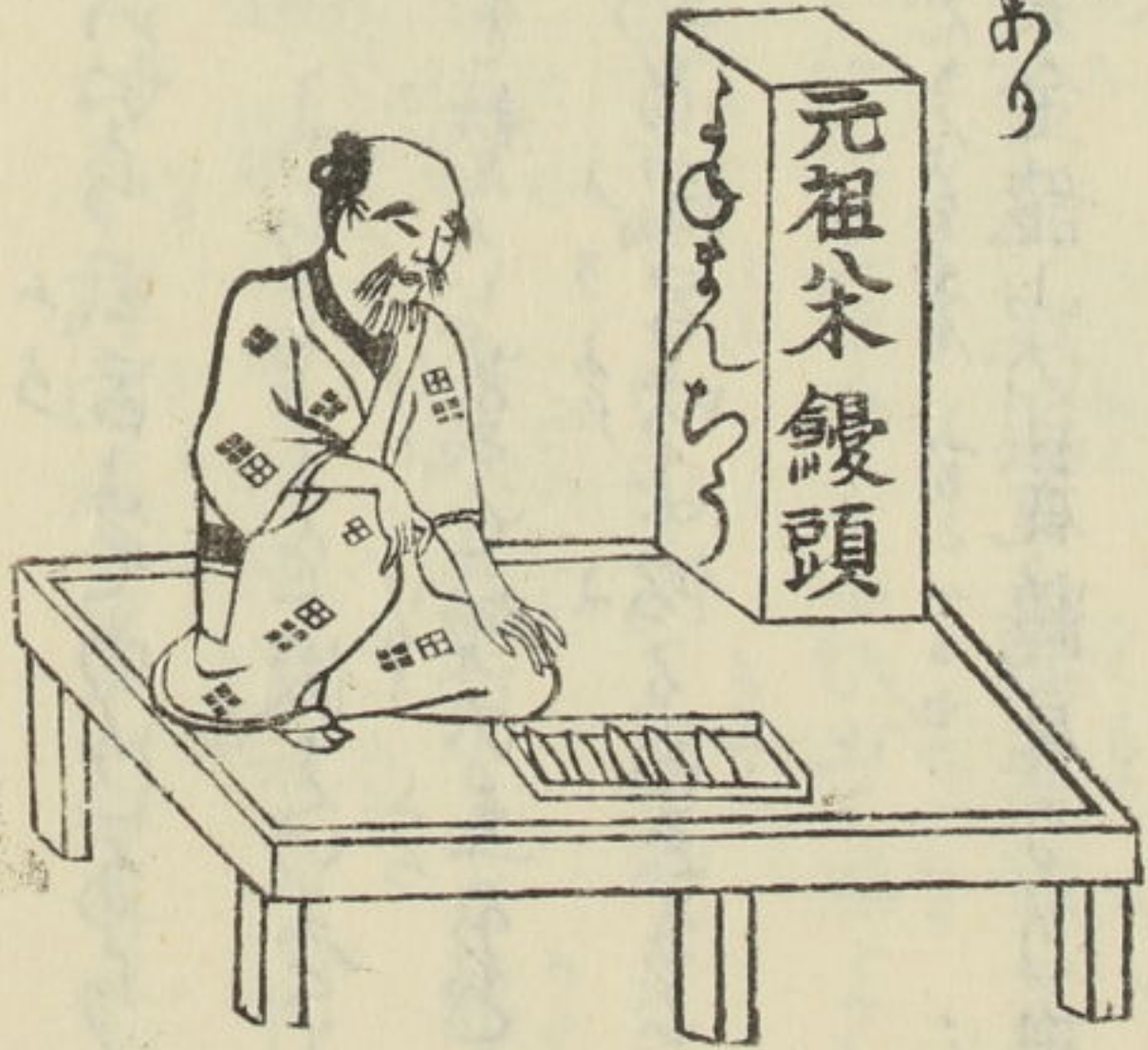
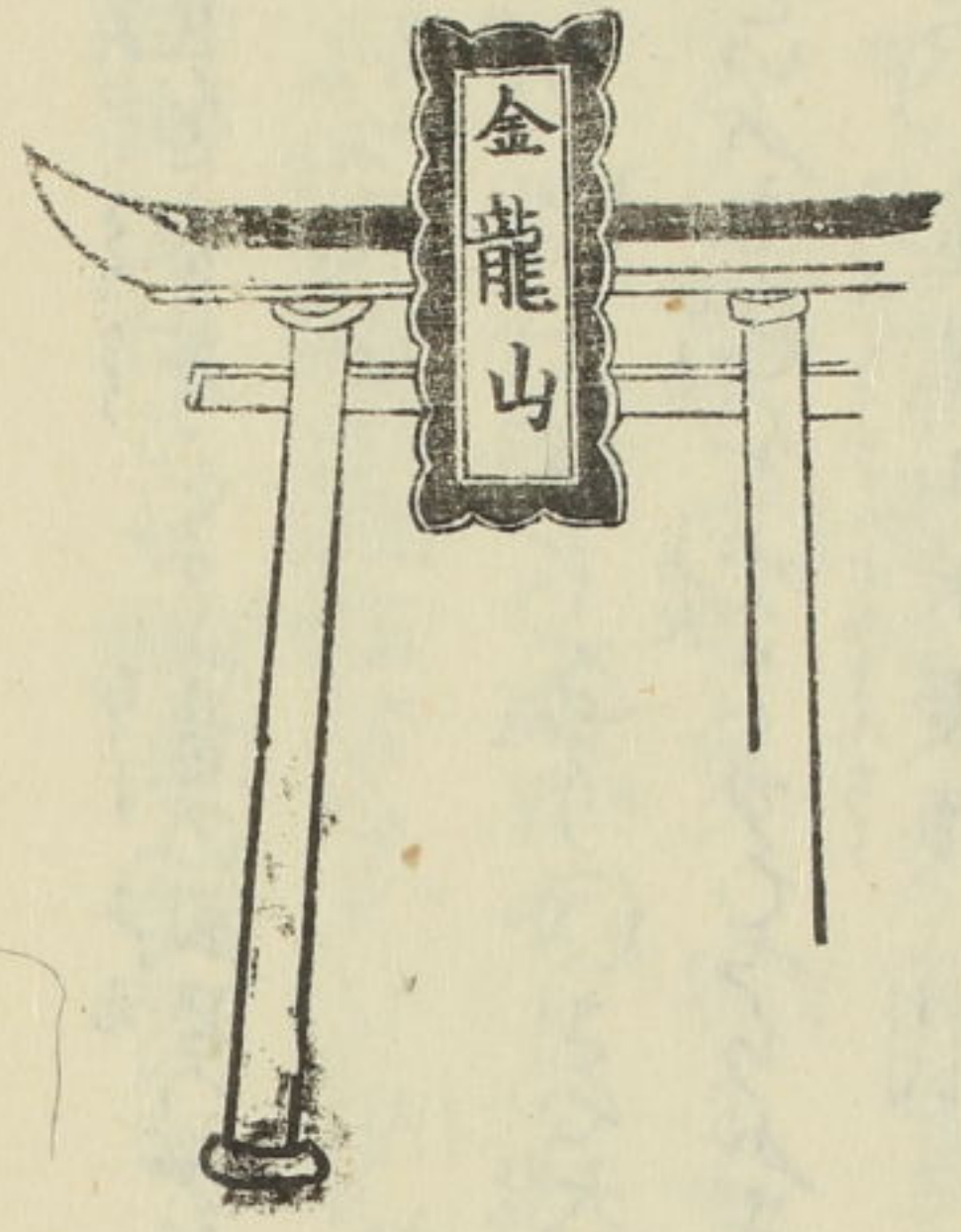
巻之五は真土山云々交の山の林鹿のふゆんらうらま

江戸中より述る名物也云くひとせと争り小うま金龍山と同道云よりりり

ひびりよままんらうとうのたり云々
當時よままんらうのおまりれ

享保の比の板江戸八景の繪本は金龍山聖天は二王門ありて
ひびりよままんらうの店あり近江老も其のまらりあり

延宝六年板菱川の繪本は此辻賣の番あり



月堂上編上十六

江戸鹿子

古真土山の条は坂の
登口又聖天町の門前
由左右ともに茶屋あり
此林鹿御伊勢巻の
饅頭の名物ありとす
ふゆんらうとす
このれが
伊勢巻と
いふ由
あり

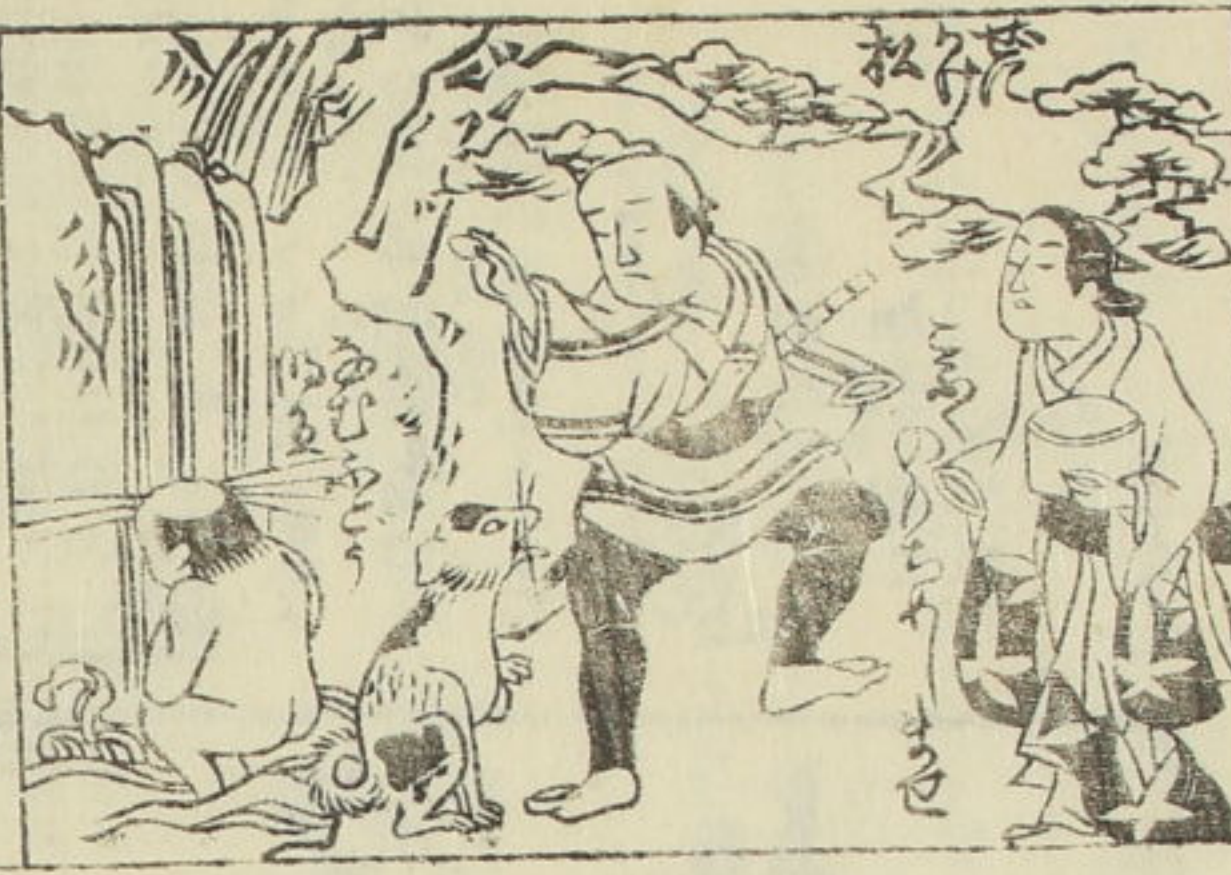
名物
米饅頭
金龍山
ぬもこやに御

これの昔よままんらうをいふは板袋あり

右は利貞享板江戸鹿子よ
えゆらありとやあり

られ古に屏風の下張より出たり
昔風ののびららありやあり
とてびあれと筆のついでよ
うらうら

月々のふり



かすみのたを
みちのれを
月々のふり
これすかすか

目黒の餅花

昔目黒不動尊の門前より餅花の餅を賣りては福の餅
ありては呉服のりらと申すれども物にありては福の餅
思接するに御殿のりらありては福の餅
依りては餅花の餅を賣りては福の餅
餅花の餅と申すは餅花の餅を賣りては福の餅
餅花の餅と申すは餅花の餅を賣りては福の餅
餅花の餅と申すは餅花の餅を賣りては福の餅
餅花の餅と申すは餅花の餅を賣りては福の餅

江戸八百助 延宝六年板
青雲 来雲

附 目黒の泉の音がとびはく

延宝の時より目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく
目黒の泉の音がとびはく

耳の垢取

江戸鹿子 貞享四年板
耳垢取 神田紺屋町三丁目長宣とあり母も比京あり

京羽二重 貞享二年板
耳垢取 唐人越九兵衛とあり 初音草啗大鑑 元禄十一年板

五よ「京と江戸也」通町の通りをうればあつひ歯ぬれ耳の療治

老人養草 正徳六年板
よ云近來京師の通り耳垢取とて紅毛人の如く似て

よ云とのれがえ緑の末正徳の比中もありしあり

觀音で耳をわらせとてかたりぎん 其角

此も耳垢取の通りをいへるあり

一代男後日 刻板の年号あり持よ西鶴が廿五年の
二之巻よ云「松浦浮平戸とのり所よ

よららある草の屋をわけて云く髪を惣あはせよとて長崎一官と名を

よららある草の屋をわけて云く髪を惣あはせよとて長崎一官と名を

よ一官とのり耳の垢取ありあらん

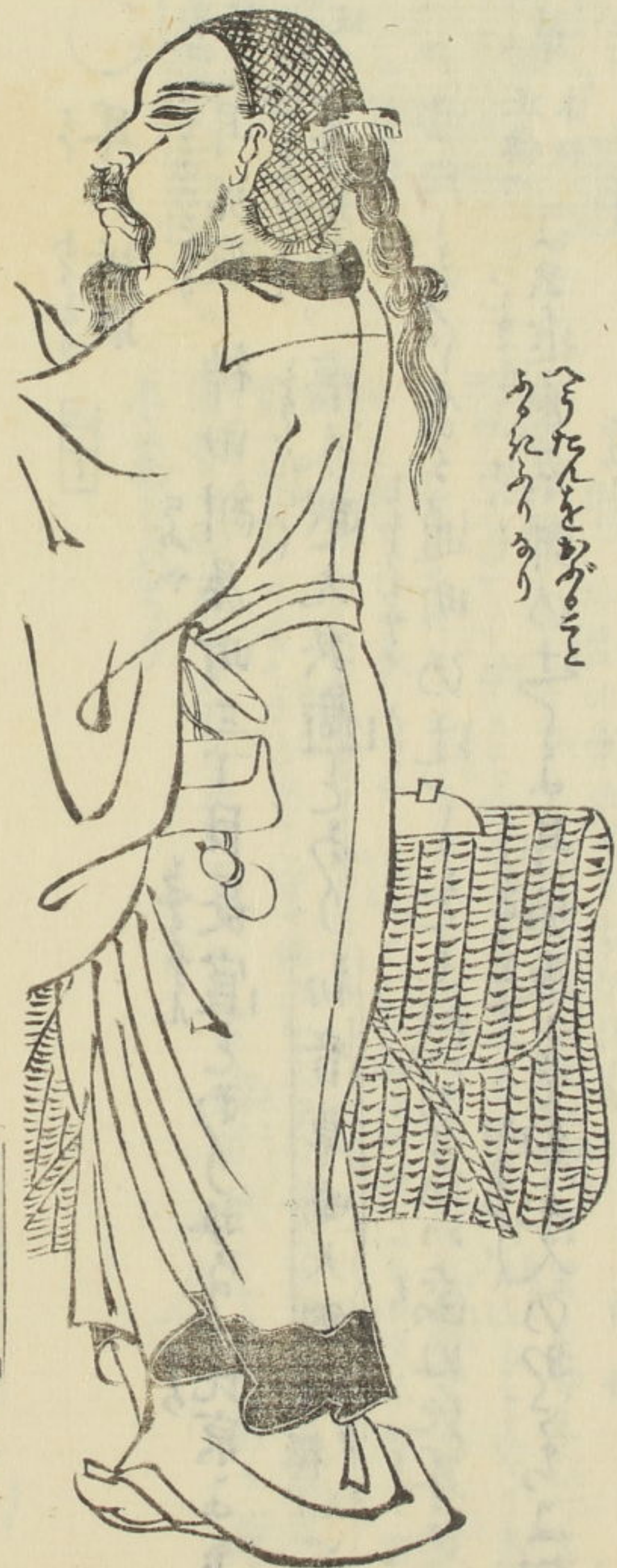
耳垢取古番

亡友大朝此番を
殺して予よあふ
接ふられえ縁を
か憎るべ

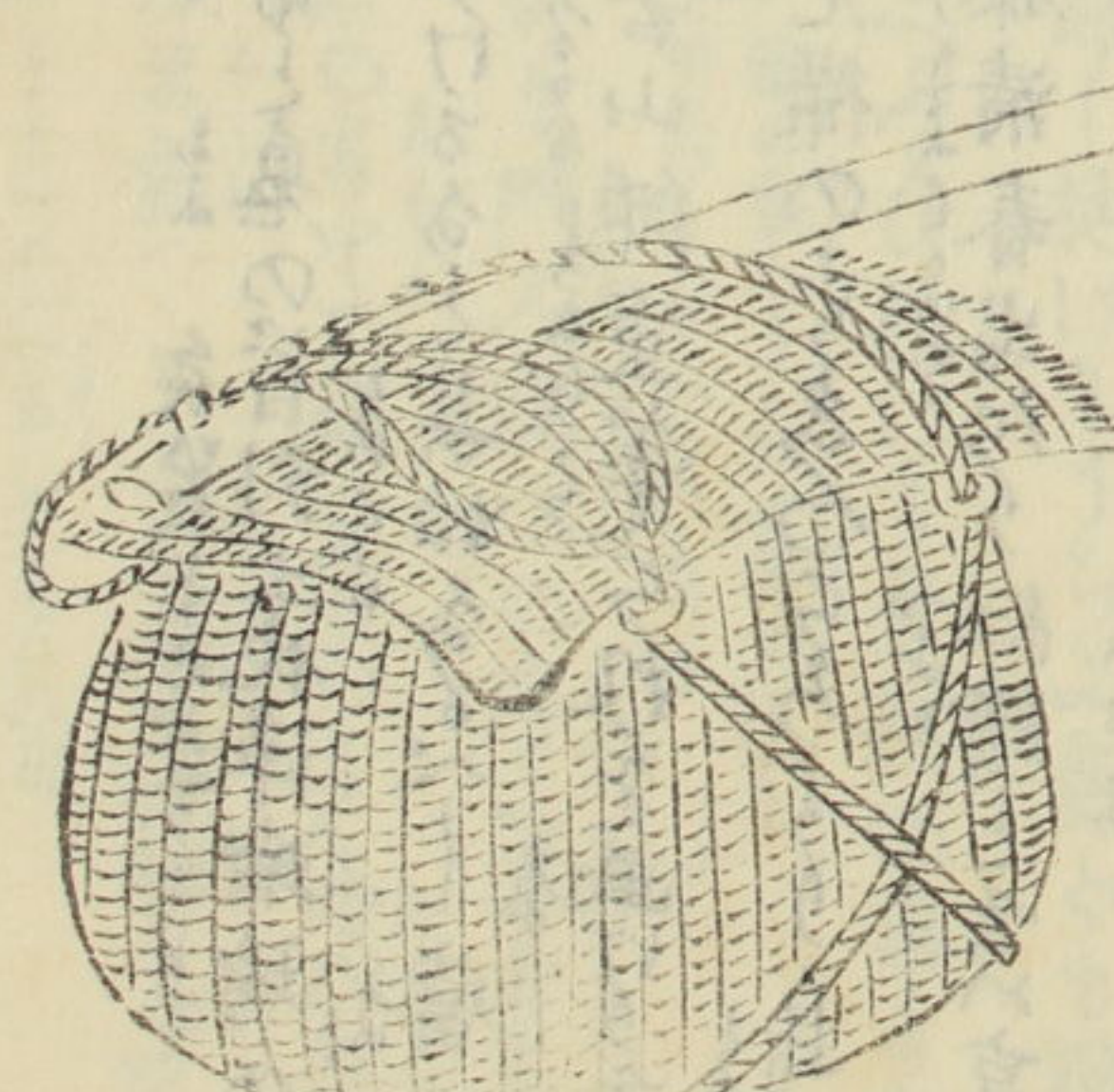
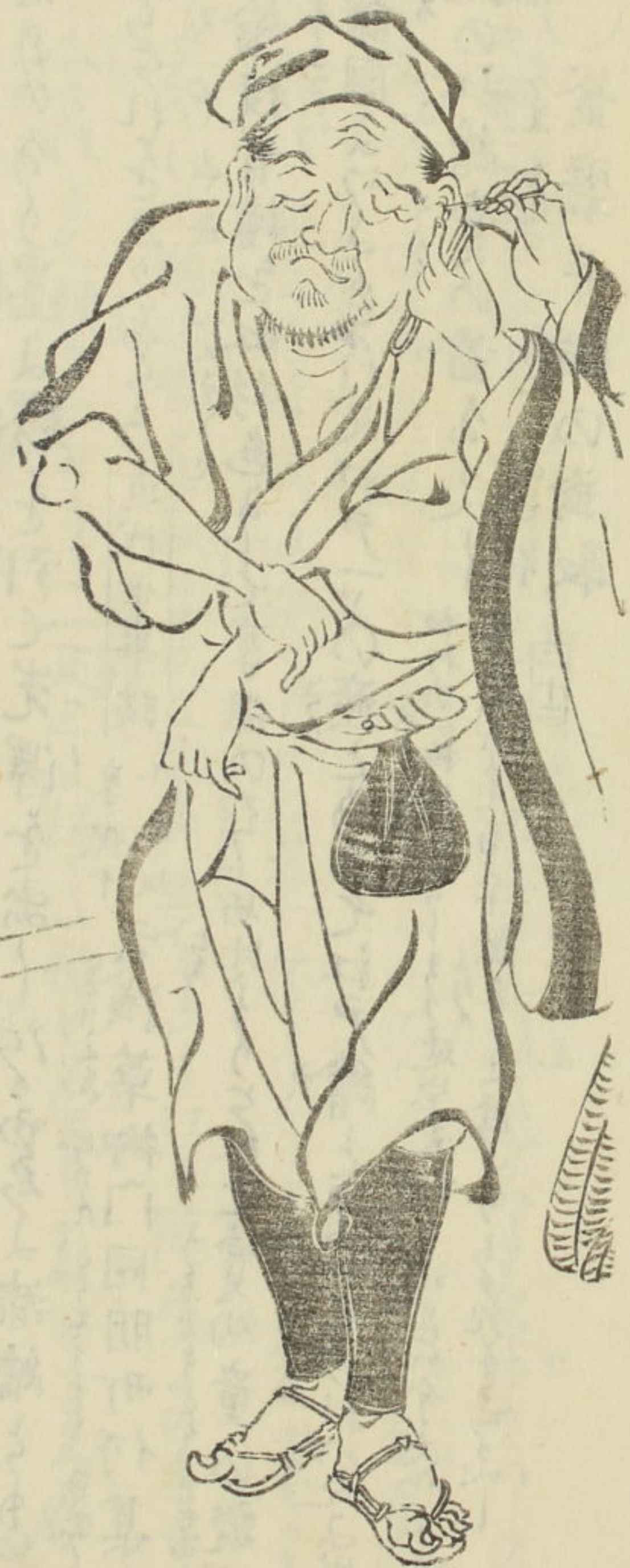
今うたをわがこと
あらたなり



骨董上編 上六



英氏画講も
耳垢取の番
あれはも草画よ
微細もらば
此番よ異なり



○藤脂繪賣 三十一

按よ板行の一枚繪に延宝天和の比始れる牧朝比帝と鬼の首引土佐淨瑠璃の繪
鼠の嫁入の繪の類々芝居の繪の坊主小兵衛を多ぐるるもど其始あるべし當時の
丹緑青あどくすむぐらよ彩色一たり菱川師宜古山師重等それを画けりえ緑
のらむより丹黄汁よて彩色とそれを丹繪といひえ緑のどるらむより鳥居
清信其子清倍等それを画けり宝永正徳小至て近藤藤清春出たり紅繪と云い享保
のらむれ創意りのあり墨よ膠を引て光澤を出したるゆゑ漆繪ともいふ
奥村政信りられを多ぐるるもど近代世事談 享保十
九年板云浅草御門同朋町竹某といふ
者板行の浮世繪役者繪を紅彩色よて享保のらむれ比よりそれを賣幼童の顔びと
し京師大坂諸國よりこれ又江戸の産とありて江戸繪といふとあれはたは摸
出よ享保の比の紅繪賣の首あるべし
板行の一枚繪のらむより延宝天和と決まらん今文化十年よ
そのとくも百十餘年を経たりうらむれを多ぐるべし

○釜磨并猫の蚤取 三十一

以月重上編上十九

西鶴織留

三之巻よ云どだ一年の師考よ電の上塗を仕よするをすよつのみよん

事と思ひよ又そのの暮よの連者ある男が釜みかたにありきよゆる大釜五丈其外
大かによらびニ文ぼや云くも前よ人をりよぬ者ハ侍手よ云く又五十なるもの男
風呂敷をくよにけし猫の蚤を取まよと声立てよつりける隠居がその手白ニ毛を
つらむらう人よとれと頼されけりよ一疋ニ文ぼよ極め名譽よ取けるも猫湯を
ゆきて洗ひぬれ身を其よ狼の皮よほみよあつ抱けるうらよ蚤かぬぬれたる
所をうたごよとよ狼の皮ようつりけるを大道へあひ捨ける豊程の事よもその
も何とてつる分別仕切身をこの種よありぬ云
猫の蚤よとていふ者ありし
右の織留ハ西鶴の遺稿を正徳二年刻せるあり門人團水の序よ羊書遺して
つら西の葉月よ此きをまぬといふ元禄六年の右の書中よ元禄二年の事を時をあらん
舞ののまき 元禄十
七年板の序よ云大坂の西鶴が咄よらひの風呂敷つらよせよらにゆきて猫の
蚤とていひて口過る者ありと語られ云
とていふたれハ此事ありけれ
りつらつとていふたれハ

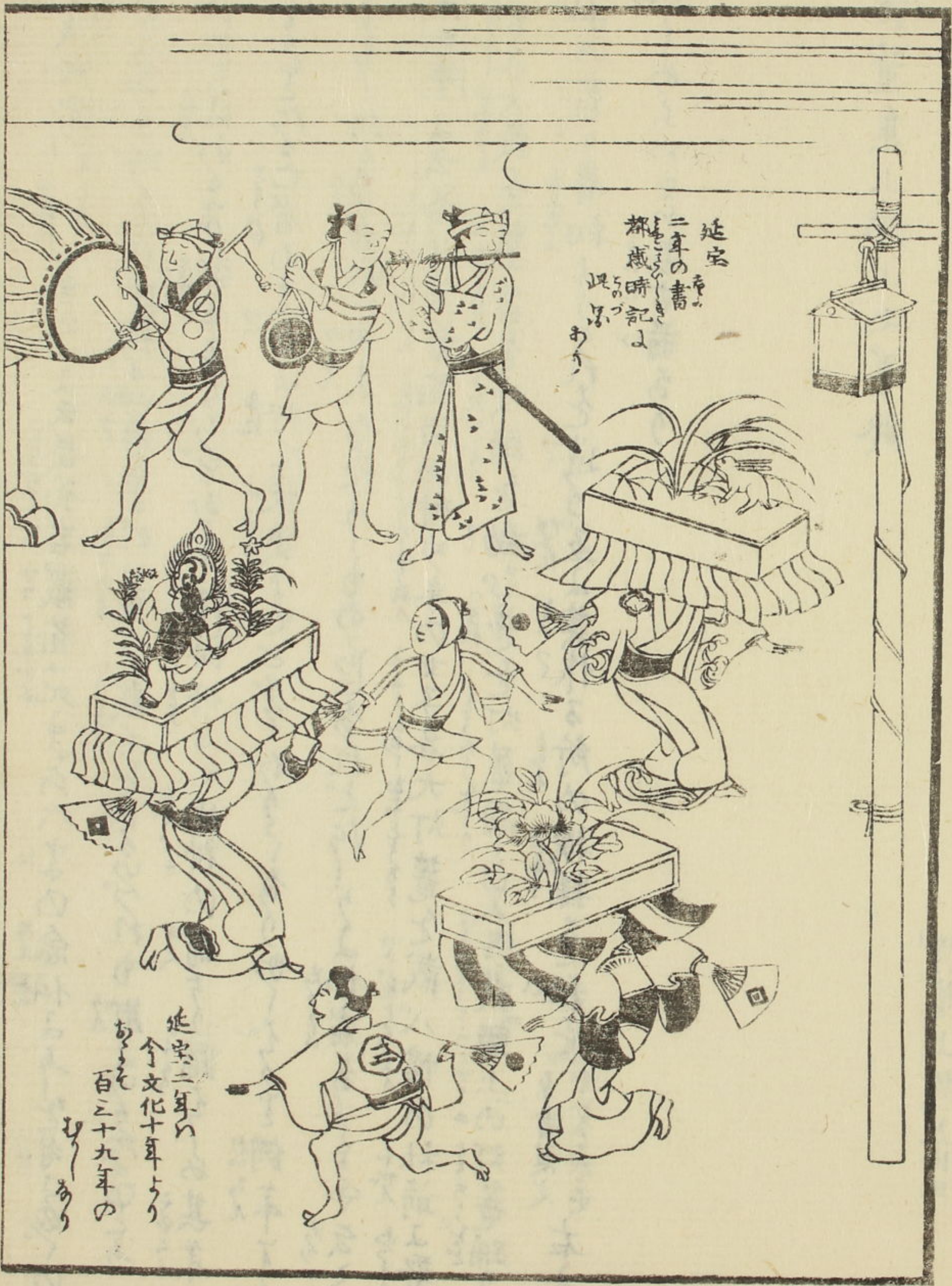
物の袋めく物をまぶら縫てほまありられを浮世袋といひあらりたるありとせし
 五人娘 貞享三 卷之二 浮世袋といひあり 一代女 貞享三 浮世袋 卯子酒 序 宝永 六年 浮世巾著
 又卷之三 浮世袋といひあり 類あるん粟嶋といひ踊歌の文よをれ針くま穢らき世袋
 り名目んえたきあるん 類あるん粟嶋といひ踊歌の文よをれ針くま穢らき世袋
 雛形とあらりゆふ今粟嶋の神よ手向る三角の袋めく物い則浮世袋あることとせ
 知りぬられいをゆる謳歌の説をとるある考と戦あからせし粟嶋の神を女神と
 謬るより童女針葉の達と願をうけ浮世袋を手向るまあらん

○初雪の句 三十六

初雪や犬の足跡梅の花と云わ何人のひひぐたるま 童もららむとむむく 五元集
 の巻云 雞去画竹葉 是の五山沱の僧雪の聯句は犬走生梅花といふ對あり云
 右の聯句よりとづ欵或の暗合したる欵

○燈籠踊の古昔 三十七

骨董上編上三



延宝 二年の書
 舞臺時記
 此の
 あり

延宝二年の
 今文化十年より
 百二十九年の
 ひりあり

部歳時記

序の延由
二年とあり

巻之四よ云長谷岩藏花は此の六字の念仏よりを符さぬの

花をどぶり巧をほしたる四角ある灯笼を戴てをぐるぐれも肝心のりたるひと

まゐめて品あるの都ももどらどありは此所よて氏神の前より踊らぬ其年

みまるとたる亡者の家より行て夜更中をどぞありてありのりたるを例年

ありたりたるのりあれが由未るたりもあれどたりりよ知者ありとや云こ

目次紀事よ云洛北岩倉花園両村少年の女子各大灯籠を戴八幡の社前よ聚

て男子大鼓を軒手笛を吹踊を勧む是を灯笼踊といふ所戴頭上の灯笼踊る

女子の家よ春初よりこれを造る互よ其作る所の模様を秘と

摸しあらしりとい其古昔あり

骨董集上編上之巻終

